『新しい学校』一九五三年八月（興文館）

■教育時評

入学試験について

―季節はずれの時評―

今時こんな季節はずれな考察をするのは気がひけるが、今の方が考えようによってはよいような気もする。

だんだん時勢が落ちついて来て教育も漸く軌道に乗ったようだという声をしばしば聞く。所がそれと同時に入学試験の勉強が熱心に行われ出したのには驚くべきものがある。まず幼稚園が何々附属小学校へ入学させるために非常に熱心である。小学校はそれ程でもないようだが、或る種の学校は相当なものである。中学校は公然とやっている。東京では夏休みを返上して準備勉強をする学校があるそうである。高等学校は普通課程が三年間まるきり試験準備の学校となっている。落ちついたと言われると同時に、こういう現象が著しくなったのは一考を要するのではあるまいか。新教育などといって教育改革の気運にもえたのもどこへやら、地金が出たという所だろうか。

先日も東北のある中学校の先生が来て、新教育の方法について種々よい意見を述べた後、「併しこれを阻害するものは結局高等学校への入学試験です、僅か二〇％の生徒のためにこういう科学教育のプランが実行出来ないのです」と嘆息した。ここで私が、何とか工夫の仕方はありそうなものだなどということを言っても、空々しいことになるのである。入学試験は現に本当の科学教育をするより、教科書の言葉の棒暗記をした方が成績がいいのである。だから子供のことを考えてやれば、試験によい成績をとらせて入学させてやりたくなるのは人情である。

併し学校の先生はこれが実際には子供を育てるものでないことをよく知っているのである。入学試験によい成績をとるには、決して子供を本当に教育しなくてもよいのである。科学がわからなくても試験にはよい成績をとることが出来るのである。試験をする側から言えば、本当にしっかり学習して居るものが、よい成績をとる筈だというのである。それも本当である。もし皆が全然入学試験を考えずに学習して居るという条件で試験をすれば、それは確かに学習の結果を表わすことになろう。所がそういうことは夢のような話である。そこで入学試験は試験準備の状態をしらべることになるのである。そして試験準備は決して教育ではないと言い切ってよいであろう。科学について言えばがむしゃらに、考えることなく、わからなくても棒暗記するか、公式適用の技巧をおぼえるかである。もっと適切な例は、音楽で音がわからなくても楽譜がよめればよいといった如きである。所がこれはわかりやすい例であって、ペーパーテストで行うことは、どの教科でもこの程度ピントの外れたことが多いといってよい。

先頃或る大学の教授が、この頃の学生はものがわからない、言葉だけの公式論はあやつるが、うすっぺらだといったが、要するに、じっくり世の中の大切なことと取りくんで勉強して来ていないのである。入学試験のための準備はそういう観念論者にするのである。これは共産党員を養成している如きものである。準備教育などというが、教育などという名前は到底つけられるしろものではないのである。中学校の二年間も高等学校の三年間もこういう試験技巧をやらされる子

供たちが可愛そうである。だが私の言いたいことはこんなことではなかった。この問題はもう三十年も前からやかましくて片づかないことなのだから、一挙に解決出来ることではあるまいが、ただこのままで教育ならざるものが平然と横行して、それをいけないとする感覚がぼやけてしまうことを恐れるのである。試験のことが云々されるのは例年の行事であって、しまいにはふんとも言わなくなるということである。十年かかっても仕方がない。根本的な対策をたてて、この似非教育を追放しなくてはならぬであろう。

学校差があるならこれをなくする根本対策をたてるべきである。学校の数が少いなら、増加して行くべきである。真剣にとりくんで、たとえ十年かかってもやるべきである。学者や教育者の待遇を問題にするのもよいが、実は同じ根から生えているのである。日本の社会が教育というものを甘くみているということこれである。本当に人を育てることがどういうことだということを考えていないことこれである。それを克服するものは、教育者の良心以外にはないであろう。若し教育者がこれをなし得ないならば、日本の社会は救われない。試験技巧の達人の充満した社会を考えてみるがよい。その時社会は大きな復讐をうけるであろう。その時ではもう遅い。この問題は毎年その季節が来た時、とりあげたのでは、間に合わないので結局毎年お茶をにごすことになっている。今年は今からとりあげて、試験準備の追放に半歩ずつでも一歩ずつでも前進して行く方法を考えてもらいたいものである。

（矢　口　　新）